

年々桜の開花が早くなっているように感じます。今年もそろそろつぼみがふくらみはじめています。

現在会員登録数 4,241 人さま。次号は 4 月 20 日発行の予定です／

＋-----◇◆◇ 目次 ◇◆◇ -----＋

【1】お知らせ

【2】コラム

《1》この本読んだ？

《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

《3》子どもの本の珠玉のことば

《4》行って来ました！

《5》宮川健郎 私の出会った児童文学者たち

【3】全国のイベント紹介

【4】プレゼント

＋-----＋

■-----■  
【1】お知らせ

●「第40回 日産 童話と絵本のグランプリ」入賞作品決定

全国のアマチュア作家から寄せられた創作童話 1,490 編、絵本 277 編、合計 1,767 編の中から、入賞作品 38 編が決定し、3 月 9 日に表彰式を行いました。

・童話の部大賞『今日にかぎって』 樺島ざくろさん

・絵本の部大賞『うつらうつら』 スーヅィさん

上記の2作品は、後日、絵本として出版されます。

◇ 絵本の部 入賞作品展 3 月 24 日まで、大阪府立中央図書館で開催中。

施設の開館日時にご覧いただけます／入場無料

→[http://www.iiclo.or.jp/07\\_com-con/02\\_nissan/index.html#tenji2024](http://www.iiclo.or.jp/07_com-con/02_nissan/index.html#tenji2024)

◇ 表彰式内で実施した、40 周年記念フォーラム「童話を語る・絵本を描く - 童話・絵本のつくり手を目指すみなさんへ」は、後日、YouTube チャンネルで公開します。

● 寄付金を募集しています

当財団の運営を応援いただける個人、法人の皆さまからのご寄付を募っています。寄付金は、当財団が行う講座・講演会など、さまざまな事業経費に充てさせていただきます。ぜひ、ご協力いただきますようお願いいたします。

※詳細は → [http://www.iiclo.or.jp/donation\\_10th.html](http://www.iiclo.or.jp/donation_10th.html)

※Syncable (シンカブル) = 継続寄付 (毎年/毎月)、単発寄付が選べます。

→ <https://syncable.biz/associate/19800701/>

- YouTube「大阪国際児童文学振興財団 公式チャンネル IICLO」

<https://www.youtube.com/@iiclol196>

公開内容一覧は → [http://www.iiclo.or.jp/ml\\_youtube/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_youtube/index.html)

- 当財団公式 X (旧 Twitter) → [https://twitter.com/IICLO\\_News](https://twitter.com/IICLO_News)

■ ----- ■  
【2】コラム  
■ ----- ■

\*\*\*\*\*

《1》この本読んだ？ Yasuko's & Takeo's Talk

\*\*\*\*\*

『さんごいろの雲』 やえがしなおこ/作 出口春菜/絵 講談社 2024年2月  
対象年齢：小学校中学年以上

\* 今回のゲストは当財団理事長の宮川健郎さん（T）です。

あらすじ：不思議なできごとに出会う7つの短編集。有名なレストランで働きばかりしている若者が仕事をやめ、すみれでいっぱいの子の村へ行き、指にすみれの香水をおばあさんにつけてもらって幸運を手にする「すみれの指の魔法」、女の子と弟が森の中へいちごつみに行ってしまう「リルムラルム」、お姫を亡くした若い王さまが街はずれに住むおばあさんにその悲しみを語る「王さまと虹」、子うさぎの兄弟が雪の中で迷ってきつねにだまされそうになる「セーターと雪ぐつ」などが入っている。

T：最近の児童文学作品でよく描かれている子どものリアルな厳しい現状ではない「童話」で、かえって新鮮に感じます。

Y：童話とはどういう意味で使われていますか。

T：詩的なことばで書かれ、象徴性があり、心象風景が描かれた作品ということです。戦前でいえば、小川未明に代表される作品で、戦後、一度否定されましたが、書き続けられています。私の定義で言えば、宮沢賢治もあまみきみこも安房直子も童話作家です。

Y：なるほど。情景描写が美しく、オノマトペや歌がでてきて、声に出してよみたくなるような作品という意味で共通しています。やえがしさんの作品は特に透き通るような風景が美しく、結末を読むと、どこか幸せな気持ちになれるところに特徴があるような気がしました。

T：童話には昔話から影響があって、場所や人物が必ずしも特定できません。つまり、象徴性が高いということになります。ストーリーについても、何らかの欠落があって、それをうめるという昔話的な物語が展開することになります。私がいちばん印象に残った表題作「さんごいろの雲」は、赤い犬とともに旅する貧しいバイオリンひきが主人公です。さんごいろの小さな雲が、そのバイオリンに「悲しんでいる人たちの小さな願いがかなう」魔法をかけてくれて、人々を幸せにします。

Y：私は最後の「かつらの木と星の夜」が好きでした。いつもきつねや鳥の話  
を聞いているばかりのかつらの木が空にのぼって星々に自分の話を聞いて  
もらって語り、また、地上に戻って眠りにつくという物語です。「空は、く  
だけた真珠の粉をまぶしたよう、大きな星のむこうには小さな星があり、  
数えきれない星くずが、ちかちか、ちかちか、またたいていたのです。それ  
はまるで、星たちのせわしないおしゃべりのようでした。」(p.115)という  
描写を読んだとき、空の景色が目の前に広がったような気がしました。

T：語り口の心地よさも童話の特徴です。耳で聞いて楽しめる作品だと思  
いました。グリム童話のすぐれた翻訳を読んでいるような心地がしました。

Y：挿絵も美しく、人と人の交わりの楽しさ、自然の美しさと不思議さが心に  
残る作品集でした。

\*\*\*\*\*

## 《2》イーハトヴ周遊 宮沢賢治の童話を読破する

\*\*\*\*\*

### 第103回「四又の百合」

#### 百合を売る聖なる子ども

〈正徧知(しょうへんち)はあしたの朝の七時ごろホームキャの河をおわたり  
りになってこの町に入らっしゃるそうだ。〉

すきとおった風とともに、こういう言葉がホームキャの王宮や城下に流れて  
きます。永い間、正徧知の来訪を待ち焦がれていた人民は、まるで子どものよ  
うにいそいそします。自分の家を整理し、通りを掃き清め、水とともに白い石  
英の砂を撒きます。白鬚の大臣から来訪の報告を受けた王も、思わず我を忘  
れて玉座から立ちあがります。そして、千人の食事や千人の宿の準備にかか  
るよう申し渡します。

翌朝まで一睡もせず、夜明けには出迎えの支度をし始めた王は、正徧知に捧  
げる百合の花を一茎見つけてくるよう、黒髭の大蔵大臣に命じます。大臣は  
ひとり、百合を求めて林の方へ出かけ、林の陰にある一軒の大きなうちを見  
かけます。その家の前には一人の子どもがいて、〈まっ白な貝細工のような百  
合の十の花のついた茎をもってこっちを見ていました〉。子どもは、売り物の  
百合を大臣の〈紅宝玉の首かざり〉と交換することにいったん合意します。  
が、その百合が正徧知に献げられるものだを知ると〈やるよ〉と無償で差し出  
します。王が大臣から百合を受け取ると、〈川の向うの青い林のこっちにかす  
かな黄金いろがぼっと虹のようにのぼるのが見え〉、〈みんなは地にひれふし〉  
〈王もまた砂にひざまずき〉ます。

正徧知とは、如来などとともに仏の十号の一つとされます。本生譚(ジャー  
タカ)からの着想が指摘されるなど宗教色の強い作品ですが、同時に白い百合  
や四又から、キリスト教的世界観との関連が言及されることもあります。

物語を読むうえで気になるのは、キーワードとしての〈子ども〉です。〈子供

のようにいそいそして〉〈子供のように顔を赤くして〉など、聖者を心待ちにする大人の心の高まりを子どもに喩えつつ、後半には実際に百合を手にした子どもが登場します。栗の木の下にはだしで立ち、百合を売るこの子どもには、どこか聖なる面差しが感じられます。伊藤真一郎は、〈この謎めいた子どもこそ、実は如来ではなかったか〉と、物語では姿を見せなかった正徧知の正体に踏み込んでいます（「四又の百合」平成十五年）。

一方、本作が清書されたと推定されている大正十二年頃は、童心主義（子どもの純粋な心を理想化・絶対化する考え）の時代でした。賢治の創作もこうした時代思潮の影響下にあったとも考えられています。賢治童話においても、子どもは神の側と通じる存在といえるのかもしれませんが。（ペ吉）

（本文の引用は、角川文庫『銀河鉄道の夜』によりました。）

\*\*\*\*\*

《3》子どもの本の珠玉のことば 57

\*\*\*\*\*

「あのう。ぼくのかげぼうし、まいごになっていませんか」

「かげぼうしね。いるよ。うらへまわってごらん」

リョウはよろこんで交番のうらへいきます。

そこにはものほしがあって、リョウのかげぼうしが、だらん、とかけてあります。

（「ジュース」 『ぼたぼた』三木卓/作 杉浦範茂/画 理論社 2013年2月  
p.6 \*初版は筑摩書房 1983年9月）

3月16日（土）に韓国の絵本作家スージー・リーの子ども向けワークショップ（日本国際児童図書評議会（JBBY）主催）にスタッフとして参加しました。子どもたちは、スージー・リーの絵本『かげ』（講談社 2010年8月）を紹介してもらったあと、自分の「かげ」を想像豊かに描きました。そのワークショップを見て思い出したのが『ぼたぼた』の中の「ジュース」です。

梅雨で外に出られず、鬱屈していたリョウが梅雨明けとともに外に飛び出し、興奮のあまり、かげぼうしをけっとぼし、みなとの海へ落としてしまいます。リョウはそれに気づかず、ジュースを飲んで、それからかげぼうしのいないことに気づきます。そして、引用のように、迷子のかげぼうしを探しに交番へ行きます。

「かげ」と言わず、「かげぼうし」と言うことで、「かげ」に人格ができます。リョウはかげぼうしがなくとも、行動できますが、地面にはりついている「かげぼうし」と一体になってはじめて、完全なリョウになります。かげぼうしも、リョウがいなければ、ものほしにだらんとかけられているような存在です。その描かれ方が何ともユーモラスです。

かげぼうしは、リョウに怒っていて「へん。なにがりョウだ。もうつきあってあげないから」と言います。リョウは、かげぼうしが欲しいといったオレンジ・ジュースを飲ませようとしませんが、地面にこぼれてしまうばかり。かげぼうしの提案で、リョウがジュースを飲むと、かげぼうしもかんのかげぼうしからジュースを飲みます。そして、リョウは「おいしい？かげぼうしくん」「ぼくはとても、おいしい」と言います。何の説明もありませんが、これだけで、リョウとかげぼうしが一体になり、リョウは自分を取り戻したということがわかり、読者にリョウとかげぼうしの満足感が伝わってきます。

三木卓の散文詩のようなこの作品は、無駄なことばや説明のことばが一切なく、声に出して読んで楽しく、そして哲学的です。これは『ぼたぼた』に所収されている19編の短編作品すべてに共通しています。そして、杉浦範茂の絵がそのおもしろさを違う角度から表現している点も魅力です。(Y)

\*\*\*\*\*

#### 《4》 行って来ました！

\*\*\*\*\*

大丸ミュージアム<京都>で3月25日まで開催されている「ブルーナ絵本展」に行ってきました。2023年にディック・ブルーナ(1927-2017)の絵本が生まれて70周年を迎えたことを記念した展覧会で、オランダで出版された120冊以上の絵本作品や、イラストのパネルをはじめ、原画・スケッチなどが展示されていました。

その中には、ブルーナの絵本「うさこちゃん」(ミッフィ)のみでなく、くまの「ボリス(ぼりす)」シリーズ、ぶたの「ポピー(うたこさん)」、犬の「スナッピー(くんくん)」、『しらゆきひめ』などのおとぎばなしシリーズなどの作品がありました。

入口を入ると、オランダで出版された約120冊の絵本が、初期の作品から順に、表紙が見えるようにずらりと展示されていました。家にあった作品もあり、懐かしい気持ちになりました。

次に、「1959-1999 長方形→正方形へ ブルーナさんのスタイルがうまれる」というタイトルで、判型が変化したことが紹介されていました。うさこちゃんシリーズが正方形であったことがいかに特別で、正方形がいかに美しく安定的なのかに改めて気づきました。また、ブルーナ・カラー(赤、黄、緑、青)についても紹介があり、スナッピーやボリスの茶と、ぞうやねずみのためのグレーが加わったとの説明になるほどと思いました。

「絵本ができるまで 『ぼりす そらをとぶ』のためのスケッチ」のコーナーでは、構想した段階で描かれた制作メモがありました。日本のホテルで窓を見ていたときに思いついたお話とのことで、傘をつかんでいるボリスの走り書きのような絵があり、このようなラフなスケッチから、色も線も安定した

絵ができるのかと興味深かったです。

絵を描いているところの映像も見られるようになっており、線は自分で筆先を切りそろえた筆で点をつなぐように描かれていることがわかります。手描きの線だからこそそのあたたかみがあるんだと思いました。

シンプルな形と線で、想像のための余白がたっぷりあるブルーナ絵本の世界に浸ると、複雑な世の中がすっきりと見えてくるような気がして、元気をもらって帰りました。(K)

ディック・ブルーナ絵本展公式サイト <https://bruna2023.exhibit.jp/>

\*\*\*\*\*

《5》 宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第9回

\*\*\*\*\*

第3章 あまんきみこさん

その3 『ゆめでもいい』

あまんきみこさん(1931年～)と母宮川ひろ(1923～2018年)は、同人誌『どうわ教室』(1966年4月創刊)でいっしょに勉強した仲間です。あまんさんは、母より8歳年下ですが、母が亡くなるまで、50年あまりも、ずっと友だちでいてくださいました。私も、小学生のころから現在まで、折々お目にかかることがあります。

この連載では、「思い出話」を語るだけではなく、私の出会った児童文学作家や評論家の仕事に対する考察や、さらには、そこから、現代児童文学史のとらえ直しも試みます。ご愛読ください。

今回で、第3章「あまんきみこさん」はおわります。来月は休載させていただき、2024年5月配信の第165号からは第4章「宮川ひろ」です。

<本編はこちらから>

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/watashinodeatta.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/watashinodeatta.html)

■-----■

【3】全国のイベント紹介

■-----■

●大阪国際児童文学館を語る会・考える会 2024

「－すべての子供に本の喜びを－言葉と歩む」

第1部 講演会「言葉と歩む」 講師：小風さち(児童文学作家)

第2部 対談「子どもの本のたのしみ」小風さち、土居安子(IICLO理事・総括専門員)

日時：3月30日(土)13:30～16:20 場所：ドーンセンター(大阪市)

主催：大阪国際児童文学館を育てる会 ※有料、要申し込み

上記イベントの詳細およびその他の講座・講演会、展示会、公募情報については、こちらからご覧ください。↓↓

[http://www.iiclo.or.jp/03\\_event/04\\_other/index.html](http://www.iiclo.or.jp/03_event/04_other/index.html)

※イベント情報をお送りください。当財団HPに掲載させていただきます／

■ ----- ■  
【4】プレゼント

■ ----- ■  
今号のコラム《1》「この本読んだ？」で紹介しました『さんごいろの雲』をプレゼントします。ご希望の方は、プレゼント応募フォームから、(1)お名前 (2)郵便番号・住所 (3)電話番号 (4)メールアドレス、よろしければ (5)このメルマガのご感想をお書きのうえ ご応募ください。

応募フォーム⇒ <https://forms.gle/lGzdaWoDzE4pc7ku8>

締切は4月10日(水)、当選発表は発送をもって代えさせていただきます／

編 | 集 | 長 | の | つ | ぶ | や | き |

— | — | — | — | — | — | — | — |

知人の二人の子どもは今春、大学と高校へそれぞれ合格。大学生になる娘の首都圏での下宿探しや引っ越しの手配、家電の購入などで忙しそうです。一方、当の娘は卒業旅行に行くなど、毎日楽しく過ごしているとのこと。春は出会いと別れの季節だなと思いました。(TA)

-----  
みなさまのご意見・ご感想をお聞かせください。下記メールアドレスまでお願いいたします。

原則として返信はいたしませんのでご了承ください。

●このメールマガジンは、ご登録いただきました皆様に配信しています。

●配信の登録・解除・変更は、

[http://www.iiclo.or.jp/ml\\_magazine/index.html](http://www.iiclo.or.jp/ml_magazine/index.html)

●このメールの送信アドレスは配信専用です。

●記事の無断転載はご遠慮ください。

発行：一般財団法人 大阪国際児童文学振興財団 <http://www.iiclo.or.jp/>

〒577-0011 大阪府東大阪市荒本北 1-2-1 大阪府立中央図書館内

TEL：06-6744-0581 FAX：06-6744-0582 E-mail：office@iiclo.or.jp